

構成要素とキーワード（パターン）

景観形成の基本原則	構成要素	キーワード（パターン）	ページ
1. 地勢	(1) 流域の谷空間	○竜田川流域（生駒谷）	1
		○富雄川流域	3
	(2) 聖なる生駒山	○生駒山の求心性	5
		○遷移する場所性	7
2-1. 歴史・文化の文脈	(1) 大地と一体となった集落	○自然地形への敬意	9
		○ミチに寄り添う	11
	(2) 共同生活と信仰	○受け継がれる七つモリ	13
		○共同生活の中心	15
	(3) 伝統的な要素	○地域ごとの規律	17
		○ウチとソトの境界	19
		○伝統的な形態意匠	21
		○山あて	23
2-2. 市街地開発の文脈	(1) 骨格となる地形との対話	○眺望できる場所	25
		○通り空間の構成	27
	(2) 通りの空間尺度	○通りと建物のプロポーション	29
		○通りに表出する緑	31
	(3) 敷地の表情	○ヒューマンスケールの擁壁	33
		○要素の統一と絞り込み	35
		○連歌式	37
		○駅前空間の緑	39
2-3. 界隈の空気	(1) 機能的でありながら調和した幹線道路の空間	○沿道空間の連なり	41
		○結節点	43
		○情報の整理	45
		○販売空間のにじみ出し	47
	(2) 商店街の親密な空間構成	○門前町のたたずまい	49
		○車窓や駅からの眺望	51
		○駅前空間の演出	53
		○駅前空間の緑	39
3. 暮らしの営み	(1) 生業の風景	○農の風景	55
		○伝統産業の風景	57
	(2) 仮設の風景	○ハレとケの風景	59
		○アクションできる余地	61
	(3) 身近な環境改善のアクション	○アクションを意識づけるきっかけ	63
		○語り継がれてきた風土への思い	65
	(4) 人々の原風景	○名所の風景	67

(資料の読み方)

見開きで構成

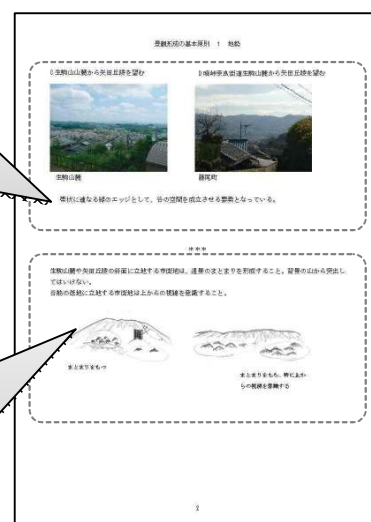
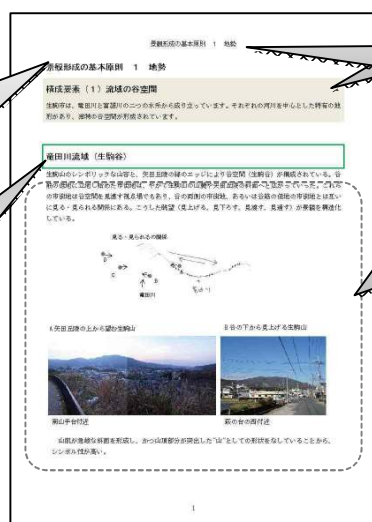
キーワード（パターン）が属する基本原則

キーワード（パターン）の名称
※枠囲い

パターンが属する構成要素

キーワード（パターン）を導くための景観の読み方や、前提となる事項について記載

キーワード（パターン）の内容（景観形成に当たって配慮すべき事項）について記載
※***以降



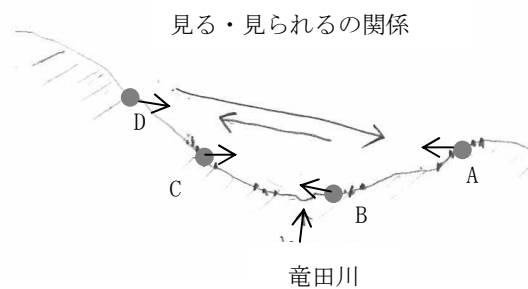
景観形成の基本原則 1 地勢

構成要素（１）流域の谷空間

生駒市は、竜田川と富雄川の二つの水系から成り立っています。それぞれの河川を中心とした特有の地形があり、独特の谷空間が形成されています。

竜田川流域（生駒谷）

生駒山のシンボリックな山容と、矢田丘陵の緑のエッジにより谷空間（生駒谷）が構成されている。谷筋の低地に立地し始めた市街地は、やがて生駒山の山麓や矢田丘陵の斜面へと広がっていった。これらの市街地は谷空間を見渡す視点場でもあり、谷の両側の市街地、あるいは谷筋の低地の市街地とは互いに見る・見られる関係にある。こうした眺望（見上げる、見下ろす、見渡す、見通す）が景観を構造化している。



A 矢田丘陵の上から望む生駒山



南山手台付近

B 谷の下から見上げる生駒山



萩の台の西付近

斜面は比較的急峻でかつ山頂部分が突出した山容であり、シンボル性が高い。

C 生駒山麓から矢田丘陵を望む



生駒山麓

D 暗峠奈良街道生駒山麓から矢田丘陵を望む

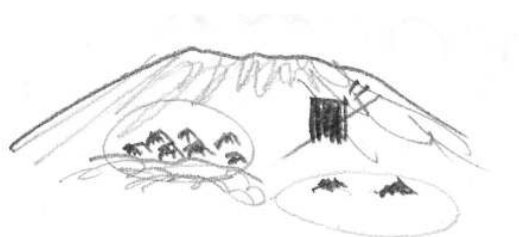


藤尾町

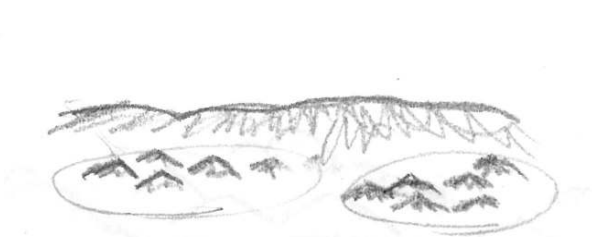
帯状に連なる緑のエッジとして、谷の空間を成立させる要素となっている。

生駒山麓や矢田丘陵の斜面に立地する市街地や集落は、遠景のまとまりを形成すること。背景の山から突出してはならない。

谷筋の低地に立地する建物は上から見下ろされる視線を意識すること。



まとまりをもつ



まとまりをもち、特に上からの視線を意識する

富雄川流域

富雄川流域にはなだらかな地形が広がっている。河川の両側の平地で農業が営まれ、背後の里山との境界部に集落が帯状に連なっている。流域の景観は、河川に沿って見通す眺望景観と、高低差が小さく平坦な地形上の小さなスケールの景観で構成される。



○里山と一体となった家々



高山町

里山の緑により、柔らかな境界が形成されている

○空の広い景観

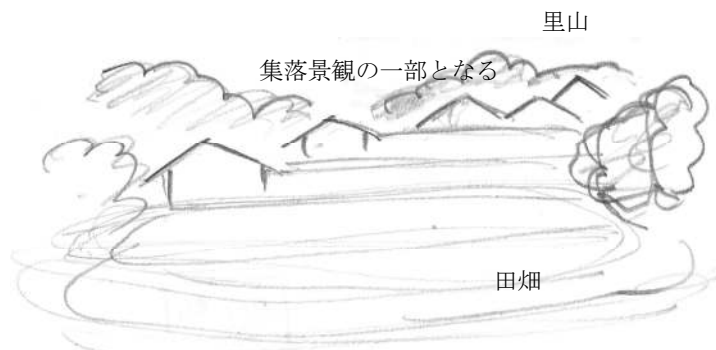


富雄川に沿って走る車道

南北方向の川に沿う道路からは、なだらかな山なみ・家なみによって視線が奥へと導かれる

景観形成の基本原則 1 地勢

建物は背後の里山や手前の農地に溶け込み、集落景観の一部となること。

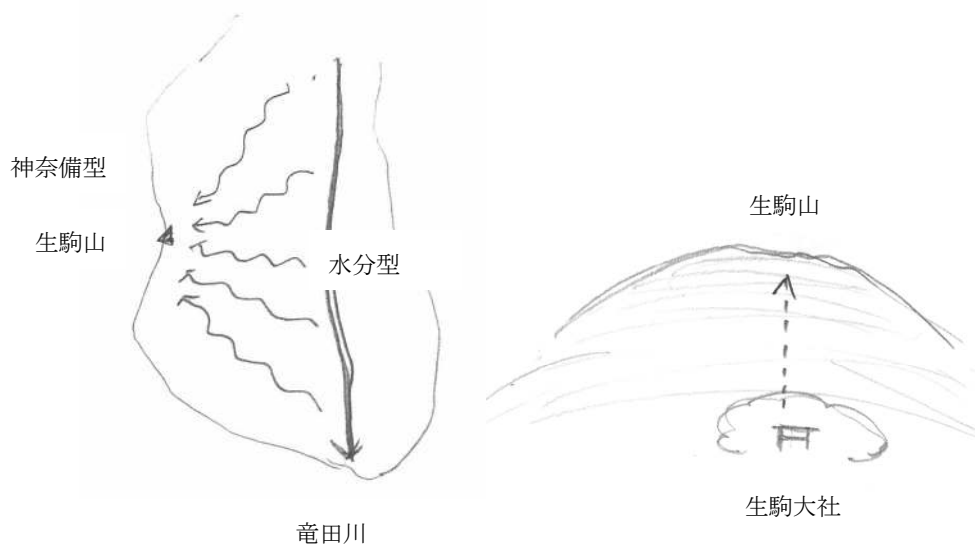


構成要素（２）聖なる生駒山

生駒山の姿は、生駒谷のあらゆる場所から見えます。その雄大でシンボリックな山容は、古来より霊山として人々の遥拝の対象となってきました。生駒山の山麓は、霊山の懷にいだかれる空間として修験が盛んに行われる場でもありました。

生駒山の求心性

生駒山は、生駒谷の谷筋の低地や向かい合う矢田丘陵の斜面地から見える主要な視対象として圧倒的な存在感を持つ。古来より往馬大社や宝山寺をはじめとする社寺において神体山として遥拝され、人々の精神性にも影響を与える強い求心力を持っている。



河内名所図会に描かれた往馬大社と
生駒山



往馬大社

往馬大社の創建は明らかではないが、奈良時代にはすでに、現在の地に鎮座していたと考えられる。生駒山への信仰を背景として創祀され、山頂からちょうど東の方向に位置する。



大和名所図会に描かれた宝山寺



宝山寺

役の小角（えんのおづぬ）は吉野の大峯山や金峯山などの山上山を開く前に、この往馬山系の千光寺を足がかりにして宝山寺の般若窟や鬼鳥の般若岩谷修行して靈力を体得したと伝えられている。

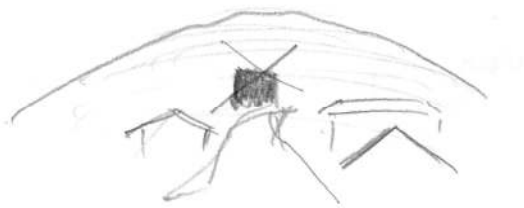
その後、般若窟は宝山寺が開かれるまで修験の行場として、また、鬼鳥山の般若岩屋も修験道発祥の靈場として知られることになった。

生駒山のこうした靈場はいずれも巨石・巨岩が露出する奇異な畏怖心を訪れた者に抱かせる結界にあり、今日でも祈祷師などが籠る修験の場として知られる。

（『生駒谷の祭りと伝承』桜井満、伊藤高雄編）

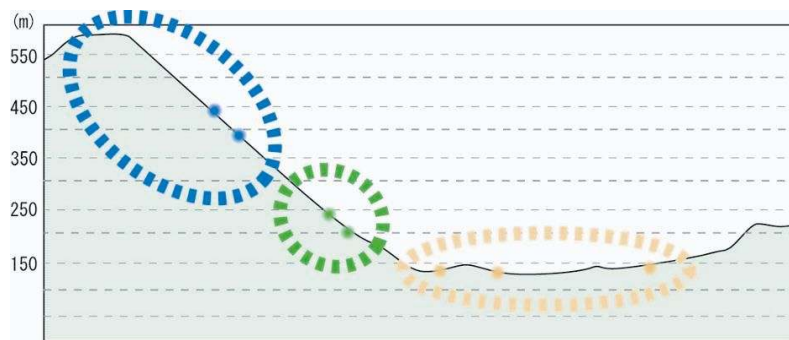
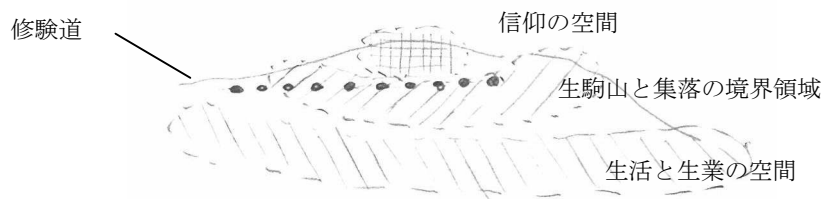
生駒山が見える場所では生駒山への方向性を意識すること。市街地の軸を生駒山の方に合わせる他、生駒山への視線を遮らないように建物を配置すること。

生駒山への視線を遮らない



遷移する場所性

生駒山から谷筋の低地にかけての空間は、低地の生活と生業の空間から山頂付近の信仰の空間へと場所性が遷移し、山麓付近は両者の境界領域となっている。山頂の稜線は生駒山のアイデンティティそのものであり、山麓から低地は住民の生活と生業が展開される世俗の空間である。境界領域には多くの寺院が分布し、それらをつなぐ修験道「庄兵エ（しょうべえ）道」が存在し、修験者の移動空間でもあった。役行者の伝説が数多く分布するのもこの辺りである。



【生駒山の山頂を中心とする空間】

- 生駒山の神聖な空間
- ・ 古来から修験者の修行の場であり、神聖な空間。
- ・ 概ね標高350m以上。

【生駒山の山麓の空間】

- 生駒山と集落の境界領域
- ・ 生駒山と集落の境界領域に、帯状に寺院が立地している空間。
- ・ 概ね標高150～350m。

【生駒谷の平地の空間】

- 生活と生業の空間
- ・ 河川沿いに農地が拓かれ、集落が形成されてきた空間。
- ・ 概ね標高100～150m。



山頂を中心とする空間



山麓の空間



平地の空間（西菜畑町）

生駒山から谷筋の低地にかけてのそれぞれの場所性を尊重すること。山頂付近や境界領域では建物の存在感を小さくし、生活感を必要以上に表出させてはならない。



景観形成の基本原則 2-1 歴史・文化の文脈

構成要素（1）大地と一体となった集落

大地のうねり、川などの自然の地形に合わせ、田畑がまず優先的に配置されました。山麓は里山として暮らしの中で活用され、家々は田畑と山麓の境界に立地しています。集落のミチは等高線に沿うように曲がりくねり、家々はミチに寄り添うように配置され、集落は大地と一体となっています。

自然地形への敬意

地形の凹凸や川の形状に沿うように、田畑や家々が立地してきた。人の手の力の及ぶ範囲で自然と向き合い、自然に逆らわない土地利用、すなわち自然地形への敬意が水利や防災の面でも重要であった。同時に、周囲の自然と調和した暮らしの姿は、見る者に安心感と心の安らぎを与えるものである。



高山町

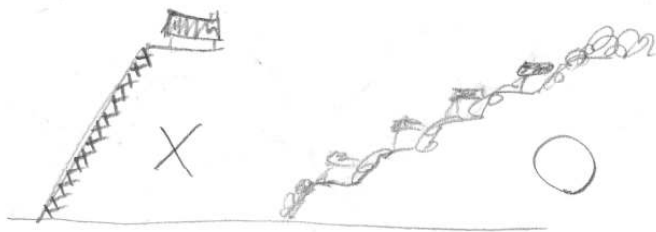
田畑の形、ミチの形、川の形はすべて曲線からなる。これらは、等高線でもある。



鹿野町

大地は大きく形を変えることなく、屋根や壁が地形の凹凸を表現している。

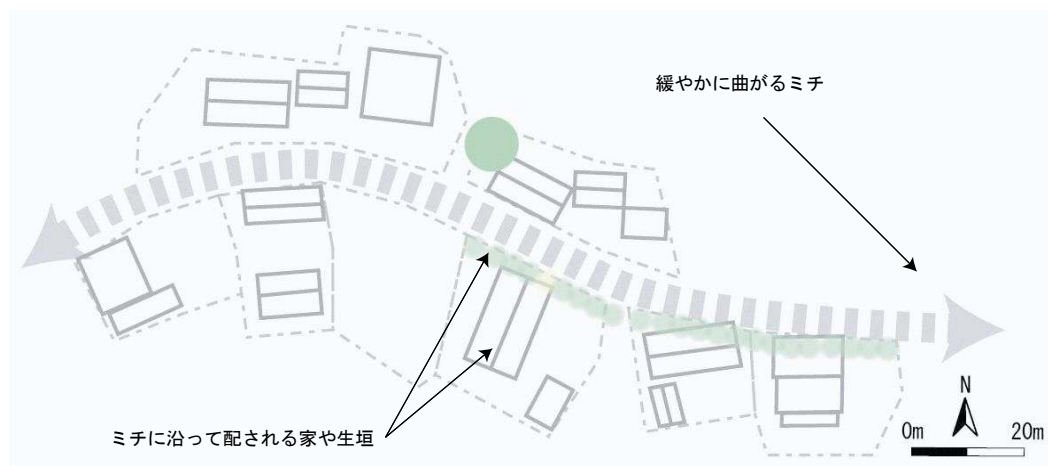
大地を平らにするために大きく改変せず、極力自然の地形を生かすこと。建物は大地の形状から突出してはならない。また壊してしまった自然は回復する手立てを講じること。



段階的に建物を配置し、自然の斜面
に沿うようにする

ミチに寄り添う

大地のうねりの上では、等高線に沿った高低差のないミチと坂のあるミチがある。等高線に沿ったミチは等高線そのものでもあり、坂のあるミチはつづら折れの曲線となる。建物はそれらのミチに寄り添うように配置される。ミチは直線的ではなく、道に寄り添う建物の敷地の中にも自然な曲線が満ちている。人工的な直線の要素とは異質である。



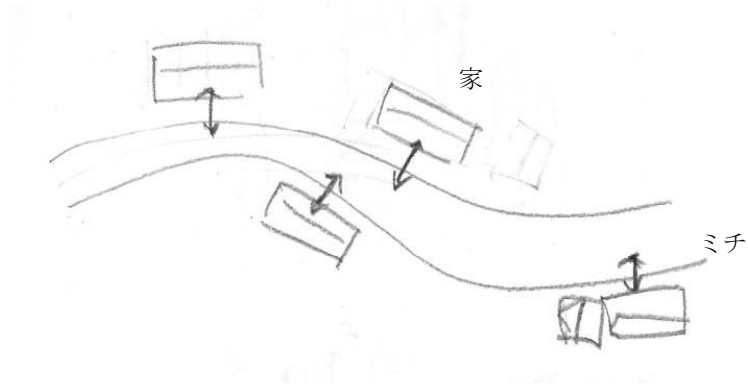
藤尾町の集落平面図



萩の台

石垣、生垣、中木、壁面、屋根のどれをとってもミチに相對している。

自然に配されたミチの曲線を尊重し、できる限り直線的な区画としないこと。



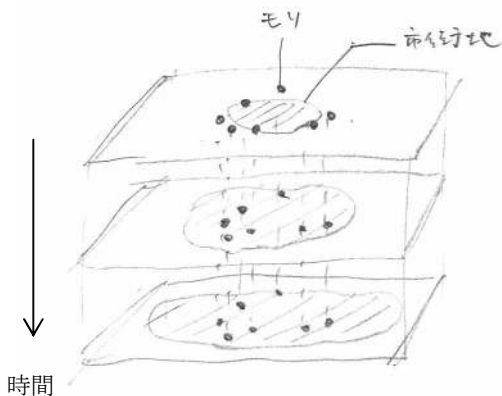
構成要素（２）共同生活と信仰

集落の中では、人がよく通るところ、使うところ、溜まりやすいところが、共同生活の中心の役目を果たしてきました。そこには火の見櫓が設置され、集会所や公民館が立地しています。また生駒谷の各集落では「七つモリ」が、数々の言い伝えとともに受け継がれ、現在も大切に守られています。集落は共同生活と信仰が構成の原理となっています。

※七つモリとは：生駒谷の各集落に存在する樹林で、それぞれ 7 つ程度存在する。木を伐ったら祟りにあつた、等の言い伝えが現在も語り継がれており、周辺の住民から大切に保護されている。

受け継がれる七つモリ

生駒谷では市街地が拡大し、旧来の集落のまともりも不明瞭になってきているが、かつて集落を取り囲むように外縁部に存在していた七つモリは、古くからの集落の場所を知る手がかりになっている。モリは古くからムラの風習と結びついており、集落での生活様式も変化してきたが七つモリにまつわる言い伝えは世代を超えて受け継がれ、人々の生活行動や空間利用の習慣の中に息づいている。



萩の台のモリ

●モリ信仰の言い伝え

「生駒谷の村々には、昔からそれぞれ固有の七つの森があり、「モリさん」と呼ばれ大切に守り伝えられてきた。モリの木を伐ると激しい祟りを受けると信じられていて、小枝一本折ってもいけない、枯葉一枚持ち帰ってもいけないと厳しく禁じられていた。禁忌を犯したために、恐ろしい祟りを受けたという体験談が、今も生生しく語り伝えられている。」

●モリ信仰と風習

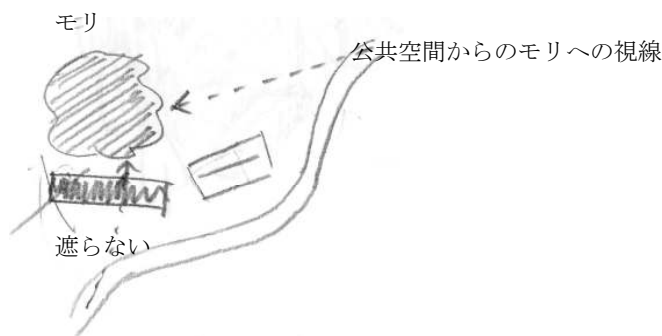
・雨乞い：谷田の鎮守の森、山崎の龍王の森、藤尾のジョーサンの森や萩の台の天神山の森では、日照りが続くとモリさんに雨乞いの祈祷をしていました。・・・雨乞いが行われていたモリはすべて、村の水源とかんがえられていた高地に祀られていました。そこはジョーサンとよばれていて、水の神である竜王がすまうと信じられてきました。

景観形成の基本原則 2-1 歴史・文化の文脈

- ・虫送り：谷田の中のモリや藤尾のジョーサンのモリでは、虫送りをしていました。農薬などのなかった時代には、伊根を食い荒らす害虫は秋の大風とともにもっとも恐れられていました・・・昼の間に松明を作っておいて、日暮とともに火をつけて鉦や太鼓をたたきながら村境まで虫を追います。害虫は松明の火に引き寄せられて集まってくると信じられていましたので、松明の火で誘い寄せてムラのはずれまで送って行き、そこでいっせいに虫を振るい落とし、松明もぜんぶ燃やして虫を焼き殺しました。
- ・カンジョウ縄掛け：むかしは流行病や災苦をもたらす邪悪な霊は、村境から村に入ってくると信じられていました。災いをもたらす侵入者をふせぐために、村の入り口にカンジョウ縄をかけて村内の安全や無病息災を祈願しました。

(『生駒谷の七森信仰』今木義法)

地域の空間的な核として、七つモリにまつわる伝承とともに、時代を超えてモリを受け継いでいくこと。伝承に反した土地の利用をしてはならない。



共同生活の中心

集落内でミチが交わる部分は人の往来が多く、店や集会所、水汲み場、火の見櫓などの機能が立地し、共同生活の中心の役目を果たす場所となっている。また空間の余裕が人々の溜まり場となってきた。こうした場所は人々の生活を支え、また交流の核となる、重要な役目を担っている。



高山町

人の往来が多く、集まりやすい場所に、集会所や火の見櫓が配置され、集落の核を形成している。



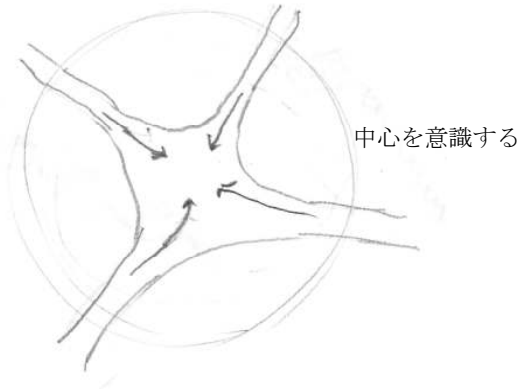
萩の台

水汲み場は、毎日欠かさず共同で利用する場であり、日々の社交の場であった。



人の往来が交差する、集落の核となる空間の近くに、かつては主な機能が集積していた。自然発生的な集落は合理性に支えられている。

住宅地の中に共同生活の中心をつくること。共同生活の中心には生活を支える機能や交流できる機能を配置すること。そこに立地する建物はセミパブリックな性格を帯びることを意識すること。



構成要素（３）伝統的な要素

気候や風土、生業などに適合するよう、生活の中で工夫が重ねられ、長い年月をかけて智恵が蓄積されてきました。それが伝統的な形態や意匠となって、今に伝えられています。それらは人々が意識しない無意識化の潜在的なルールとなっており、隠れたデザインコードともいえます。

地域ごとの規律

各地区には、コミュニティの中で形成されてきた、明文化されない独特のデザインコードが存在する。各地区にそれぞれ存在する大工や瓦職人等の職人の技術が独自に伝承されてきたこととも関係している。こうしたデザインコードが地域らしさの背後にある。



北田原町

「北田原・南田原では門を設けるのが普通で、門がないと『門があらへん家や』と村の人に言われてしまう」（上町の大工の棟梁談）

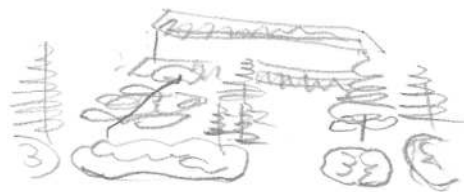
北田原では各敷地に門があり、重厚な落ち着いた村の景観が創りだされている。

地域に固有のデザインコードを読み取り、継承していくこと。

外構は特に注意し、周りと合わせる



長屋門が多い地区



石垣、樹木の組み合わせが多い地区

ウチとソトの境界

敷地の道路際は、通りのパブリックな空間から敷地内のプライベートな空間へと遷移するセミパブリックな空間である。パブリックな空間とプライベートな空間の領域が明確に区切られると、通りと沿道敷地との関係が断絶した生気のない街並みとなる。敷地の内部（ウチ）と外部（ソト）で、互いに生活や動きの気配を感じ合え、生活の一部が滲み出すゆるやかな敷地のしつらえが、通りを生き生きとした空間に変える。



高山町

生垣は「垣間見る」ことを可能にする。さらに季節の移り変わりをも感じさせ、生活に潤いを与える。



有里町

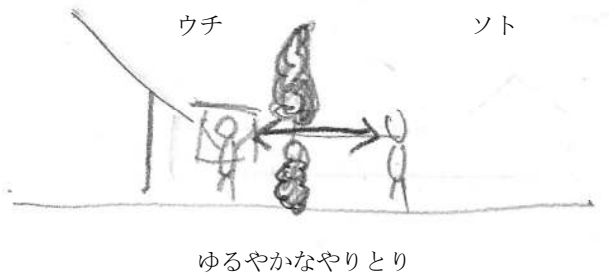
出入口のみ目隠しするように中木が粋に配されている。必要な部分は隠すが基本的に外に開かれている。



西菜畑町

パブリックな空間とプライベートな空間の領域が極めて曖昧な例。住民には心地良く、ヨソ者は歩くのも緊張を与えるような、生活の空気がミチを満たしている。

敷き際の構成が、敷地の内部（ウチ）と外部の通り（ソト）を完全に断絶してはならない。ウチとソトとで相互に気配を感じ合えるようにしつらえること。



伝統的な形態意匠

歴史ある集落では、地域の風土に応じた暮らしの作法や生業の中で培われ、長い時間をかけて磨き上げられてきた伝統的な形がある。それは敷地内の建物の配置であったり、建物内部の構成、立面の意匠であったりする。これらの必要性から生まれパターン化された「用の美しさ」は地域に固有のものあり、また共通するものもある。

【大和棟】



西菜畑町

奈良盆地一帯で見られる、大和棟。生駒南部の地域では大棟よりも本高塀（ホンタカヘイ）を一段高く設ける場合が多い。

昔の家は麦わらで葺くことが多く、厨子（ツシ）には屋根を葺き替えるための麦わらを収納しておいた。

※厨子：高い方の屋根の、内側の部分。いわゆる屋根裏の空間になっている。

【入母屋造】



高山町

日本の木造家屋に広く用いられる屋根の形式。破風を美しく作るには、大工や屋根葺き職人の熟練の技が必要。

【蔵と白壁】



上町

蔵外壁の、「七宝」の仕上げ。手間がかかるだけに、上品さがにじみ出る。
他には「焼板」を貼りつける方法、白壁のまま残すやり方がある。

【生駒石による石積み】



藤尾町

生駒石を用いた石垣が連続する。生駒山から産出される地域固有の材質を用いることで、風土になじんだ通りの景観が生まれる。

人々の暮らしの中で培われてきた伝統的な形態意匠を尊重すること。全面的に採用するばかりでなく、デザインモチーフとして一部を採用するなど、新たな使い方の工夫にも挑戦すること。

